

# 南都佛教の復興について

——特に佛像の造顯を中心に——

成 田 俊 治

## 一

治承四年（一一八〇）も暮れようとする十二月二十八日、奈良の都は紅炎に包まれ、阿鼻叫喚の巷と化した。それは、この年の四月以仁王を奉じ平氏打倒の烽火をあげた頼政の謀反に、興福寺が味方したというので、平重衡の率いる軍隊が放火したためであつた。天平以來四百年にわたつて國家の守護であつた東大寺が、藤原氏の氏寺である興福寺が、また多くの寺や民家が灰燼に歸してしまつたのである。それは、政治史的には古代的な政治機構の中に、武士階級の棟梁たる本來の姿を失いつつ貴族化していつた平氏に對し、頼朝を中心とする新しい武家政權を確立していく契機であり、また文化史的には公家文化から武士文化を形成していく契機でもあつた。傳統の上に立つ公家文化は、形式化し新しい分野を切り開く積極性を欠いたとはいへ、なお依然としてその流れは存續していたが、武士階級は徐々に公家文化を吸収し、また互に交流し合い乍ら武士文化を作り上げていつたのである。その特色とするところは個性の昂揚であつた。運慶をはじめとする初期の南都佛師に見られる力強さと徹底した寫實性、藤原

隆信、信實父子の似せ繪における個性の表出、繪卷物の流行、戰記文學の隆盛などにそれを見ることができるといふことができる。また佛敎においても舊佛敎の胎内から、學問・戒律・造寺造塔などの行法・作善によらず、むしろそれらを否定した立場から新たな淨土敎が成立したのである。

さて、平氏の南都焼打によつて天平以來の建築が失われ、これから新興の鎌倉建築が誕生し、また彫刻においても藤原時代の定朝様式の形式的なくり返しに飽き足らず、寫実と力強さを求める鎌倉様式を生み出したが、南都佛敎も、平安朝以來の淨土敎の發展がもたらした宗派としての淨土諸宗の成立が、鎮護國家の官寺や、攝關家の氏寺としての性格を稀薄にしつつ庶民的性格を持つに至つたのである。その意味において鎌倉文化を考える上に、南都の復興は重要な意味を持っているといえよう。そこで本稿では、南都の代表的寺院、東大寺と興福寺の復興について、その佛像の造顯を通して考え、また南都佛師や淨土敎との關係も見ていきたいと思う。

## 二

さて、十二月二十八日、西より吹く強風と火が起す風によつて「興福寺、東大寺已下、堂宇房舍、拂<sub>レ</sub>地焼失<sub>(1)</sub>」してしまつた。「依<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>希代珍事<sub>一</sub>」<sup>(2)</sup>つて南都焼失を寺主大法師憲清等が正月四日付で注進した文によれば、興福寺では、

「興福寺中寺外、堂舍寶塔、神社寶藏等焼失事。

一、寺中、金堂、講堂、南圓堂、食堂、東金堂<sub>并塔一基</sub>、西金堂、北圓堂、東圓堂、觀自在院<sub>高陽院御願</sub>、西院<sub>在堂四字、此内一字白</sub>  
川院、一乘院<sub>在長講堂一基</sub>、大乘院<sub>在堂三字、塔一基</sub>、中院<sub>在堂一字</sub>、松陽院<sub>在堂一字</sub>、北院<sub>在堂一字</sub>、東北院<sub>在堂一字</sub>、發志院<sub>在堂一字</sub>、觀

禪院 在堂、五大院 在五大堂朱、雀院御願、北戒壇院 在堂、唐院 在堂、松院 在堂、傳法院 在堂、眞言院 在堂、圓成院 在堂、皇嘉院御塔、總宮、一言主社、瀧藏社、住吉社、鐘樓一字經藏一字、寶藏十字、大湯屋一字但釜不<sub>レ</sub>破損、已上、堂舍三十四宇、寶塔三基、神社四所、寶藏、大湯屋等也、此外三面僧房、四面廻廊、大小□門、□□□□  
□房、諸院不<sub>レ</sub>知其數、(中略)一寺外、院御塔、殿下御塔、一切經論倉 在經論草、疏形木、率川社、宿院、佐保殿、已上燒失了、此外堂舍、諸院、諸房、菩提院、又龍華院內堂舍諸房等、不<sub>レ</sub>知其數、皆以燒失了(下略) <sup>(3)</sup>

東大寺においては、

「東大寺内大佛殿、講堂、四面廻廊、三面僧房、戒壇、尊勝院、安樂院、眞言院、藥師堂、東南院、八幡宮、氣比、多氣已上三ヶ寺兩院内外堂舍僧房(下略)」 <sup>(4)</sup>

など悉く燒失してしまつた。残るところ僅かに、

「興福寺内小房二字、東大寺内堂舍少々、寶藏、僧房少々、元興寺内本堂已下堂舍少々、僧房少々、龍藏院内本堂以下堂舍少々、僧房、在家、三分之二、新藥師寺邊、本堂、并僧房、在家、禪定院内堂舍、僧房、□野田邊僧房、在家少々」 <sup>(5)</sup>

「所殘、禪定院、并近邊小屋少々、春日山(山)内、新藥師寺西邊小屋少々也」 <sup>(5)</sup>

「纔所殘松院内房一字、尊教院房、慈禪定院近隣、龍花樹院山上已東也」 <sup>(6)</sup>

という有様であつた。

燒失した堂舍に祠られていた佛・菩薩も、「御佛一體不<sub>レ</sub>奉<sub>三</sub>取出之、是依<sub>レ</sub>恐<sub>三</sub>官兵也」<sup>(7)</sup>「寺中寺外佛像經論爲<sub>三</sub>一處不<sub>レ</sub>能<sub>三</sub>取出也」<sup>(8)</sup>と記されている如く、猛火と荒れ狂う軍兵のために、聖典もまた殆んどの佛も取り出すこと

ができず、尊勝院では、草創より安置せられていた「盧舍那佛一鉢、尊勝佛一鉢已上、釋迦一鉢、藥師二鉢、十二面延命、梵王、帝釋、四大天王一鉢已上等身」の十三鉢も一鉢残らず、また東南院では、金色丈六藥師像一鉢、同日光月光像各軀、檀相十一面觀音像一軀などが灰燼に歸したのである。天平勝寶元年（七四九）に完成した大佛殿も大佛も、天長四年（八二七）、齊衡二年（八五五）、貞觀三年（八六一）、延喜十七年（九一七）、承平四年（九三四）応和二年（九六二）にそれぞれ火災や事故にあつてゐるが、大佛殿が焼け、大佛がくずれ落ちたということは全く先例がなかつた。九條兼實は、

「七大寺已下、悉變<sub>レ</sub>灰燼<sub>二</sub>之條、爲<sub>レ</sub>世爲<sub>レ</sub>民佛法王法滅盡了歟、凡非<sub>二</sub>言語之所<sub>レ</sub>及、非<sub>二</sub>筆端之可<sub>レ</sub>記、（中略）凡佛寺堂舍雖<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>日域<sub>二</sub>、東大、興福、延曆、園城、以<sub>レ</sub>之爲<sub>レ</sub>宗、而於<sub>二</sub>天台之兩寺<sub>一</sub>者、度々遭<sub>二</sub>其災<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>于南都之諸寺<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>如此之事<sub>一</sub>、當<sub>二</sub>惡運之時<sub>一</sub>、顯<sub>二</sub>破滅之期<sub>一</sub>歟、誠是雖<sub>二</sub>時運之<sub>レ</sub>然事<sub>一</sub>、當時之悲哀、甚<sub>二</sub>於衷<sub>二</sub>父母<sub>一</sub>、慙生而逢<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>、宿業之程、來世又無<sub>レ</sub>憑歟、（中略）仰<sub>レ</sub>天而泣、伏<sub>レ</sub>地而哭、拭<sub>二</sub>數行之紅淚<sub>一</sub>、摧<sub>二</sub>五内之丹心<sub>一</sub>、言而有<sub>レ</sub>餘、記而無<sub>レ</sub>益努力々々」<sup>(10)</sup>

とその悲歎をのべ、また東大寺の罹災は朝廷の一大事であり、興福寺は藤原氏の氏寺で、その罹災は藤原氏の一大事である<sup>(12)</sup>のべ、彼としても全く末法の世を痛感せずにはおれなかつたのである。

しかし、失つたものは再びもとにかえさねばならない。できるだけもとの姿に近く再現しようとする願ひ。これが天平復興を決定的にしたのである。この理念のもとに復興は直ちに着手されたのである。

まず東大寺の再建について、その中心はいうまでもなく大佛の鑄造であり、大佛殿の建立に代表される。そこで大佛の鑄造についてその経過をみてみよう。

治承五年三月十七日、藤原行隆が勅使となつて、鑄師十餘人を率いて東大寺に下向し、大佛を鑄造すべきを沙汰し、續いて俊乘房重源は、四月九日行隆を訪問し、

「東大寺事、再々感<sub>レ</sub>靈夢<sub>二</sub>、仍二月下旬、參詣彼寺<sub>一</sub>、拜見燒失之跡<sub>二</sub>、烏瑟之首落而在<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>後、定惠之手折而横<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>前、灰燼積而如<sub>レ</sub>大山<sub>一</sub>、餘煙揚而似<sub>レ</sub>黑雲<sub>一</sub>、目暗心消、愁淚難<sub>レ</sub>抑、遇<sub>二</sub>一兩耆老<sub>一</sub>、述<sub>二</sub>心緒之處<sub>一</sub>、爲<sub>二</sub>勅使下向<sub>二</sub>之由承<sub>レ</sub>之、仍所<sub>レ</sub>參也<sub>14)</sub>」

と、去る二月に東大寺に參詣し、焼けおちた大佛をまのあたりに見、眼もくらみ、心も消え、愁淚抑え難きによつて再建の勸進にあたりたいという心情をのべ、行隆もまた天平大佛の時の行基、齊衡の時の眞如親王の勸進、智識の行動をのべ、早く綸旨を賜つて衆庶を勸進すべき由を傳えたという。<sub>15)</sub> この記事によれば、重源自ら夢告によつて勸進をかつて出たとしてゐるが、法然傳によれば

「治承四年<sub>庚子</sub>十二月十一日、平家亂逆の時、東大寺炎上の庭に、舊跡にまかせて大佛冶鑄し奉るべきよし、右大辨藤原行隆朝臣、奉行にて侍けるに、昔一天四海の民土にすめて御建立侍りける、今度も勸進上人をやつけられ侍べきよし、勅答申ければ、先例にまかすべきよし、宣くだされける刻、奉行辨秘に法然上人に御勸進侍なん<sub>16)</sub>やと、内議の返答に、源空は勸進のうは物に非ず、同行修乘坊に申合べき狀はからひて、彼上人に被召仰侍ける<sub>17)</sub>とあり、はじめ法然上人に勸進職を依頼したのであるが、法然は、自分が勸進の器ではないことを理由に辭退し、代りに俊乘坊重源を推擧したという。この自らかつて出たか、或は法然からの推擧か何れかについては、もし假に

法然に東大寺勸進職の話があつたとするならば、『玉葉』なり『東大寺造立供養記』などに記録されてしかるべきである。しかしそれについては全く觸れていない。従つてやはり、法然よりも年長（治承五年は法然四十九歳、重源六十一歳）であり、また彼が早くから土木建築方面に堪能であり、それに特別の關心を持つていたから、夢告をうけて彼自身がかつて出たという方が自然と思われる。

二ヶ月後の六月二十六日、造寺官・造佛官の任命、並に大佛殿木作り、大佛補修の日時決定があつた。

# 「一、造營事

安徳天皇御宇、治承五年庚子春、禪定法皇殊發<sub>ニ</sub>教願<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>作治計<sub>一</sub>、卽治承五年六月廿六日任<sub>ニ</sub>造寺官<sub>一</sub>、

長官藏人左少辨正五位下藤原朝臣行隆

次官三善爲信 判官中原基康

主典三善行政 造佛長官藤行隆

次官小槻隆職

左辨官下大和國并東大寺

應<sub>レ</sub>任<sub>ニ</sub>日時<sub>一</sub>令<sub>レ</sub>勤<sub>ニ</sub>行大佛殿已下木作<sub>一</sub>事

八月十日甲寅 時巳二點若未

右左大臣宣奉<sub>レ</sub>勅彼佛殿已下工役夫材木作料且支<sub>ニ</sub>配諸國<sub>一</sub>且可<sub>レ</sub>用<sub>ニ</sub>封戸庄園物<sub>一</sub> 來月十日事、寺家先募<sub>ニ</sub>庄園之

年貢<sub>一</sub>、任<sub>ニ</sub>日時<sub>一</sub>宜<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>勤<sub>一</sub>行<sub>ニ</sub>者<sub>一</sub>、國寺宣承知、依<sub>レ</sub>宣行<sub>レ</sub>之

治承五年六月廿六日 右大史中原朝臣在判奉

少辨藤原朝臣

日時勘文

陰陽寮

擇<sub>下</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>東大寺木作<sub>ニ</sub>日時<sub>上</sub>

八月十日甲寅 時巳二點若未

(連署—略—)

陰陽寮

擇<sub>下</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>修<sub>ニ</sub>東大寺大佛<sub>ニ</sub>日時<sub>上</sub>

十月六日己酉 時巳二點若午

治承五年六月廿六日

(連署同前—略—)<sup>(17)</sup>

即ち、造寺官として長官藤原行隆(兼造佛長官)、次官三善爲信、判官中原基康、主典三善行政、造佛次官に小槻隆職がそれぞれ任ぜられ、同日陰陽寮に於て大佛殿木作りの日時を八月十日、大佛補修すべき日時を十月六日と定められたのである。ついで養和元年(治承五年七月十四日改元)八月に重源に勸進の綸旨が下り、<sup>(18)</sup>彼は勸進の狀を出して勸進を始めた。

先に定めた十月六日、戒師が鑄工らに戒を授けて後、多々羅をふみ羅髮の鑄造が始まった。<sup>(19)</sup>これが大佛鑄造の第一歩であつた。難しい大佛の鑄造も宋人陳和卿の協力により壽永二年(一一八三)二月には大佛の右の御手を鑄造

南都佛教の復興について

し、四月には御首を鑄造しはじめ、これにたずさわつた技術者は、「宋朝工七人、大工陳和卿、舍弟陳佛壽、從五人、日本鑄物師工十四人、大工散位草部是助。長二人、草部是弘、同助延。小工十一人、是末、助吉、爲直、助友、貞永、延行、助時、助友、助包、是則、宗直」<sup>(21)</sup>であり、五月十八日、三十九日間鑄ること十四度に及んで御像は完成したのである。『東大寺續要錄』にはその鑄造の方法をのべ「重源と陳和卿と協議し、大鑪三口を作り、大佛殿の後ろの山を足場として佛像の上の東西に置き、この鑪は口徑一丈、高さ一丈餘で、湧いている銅を八千斤或は一萬斤を注ぎ、錫の湯を鑪の内に大河の江河に注ぐ様に流し込み、焰は飛んで空中に上り、猛火は泰山を燒くが如く」<sup>(22)</sup>であり、また時には「湯になつた銅が佛像の胸から流れ出し假屋が燒え上り、黒雲の様な煙を出す」<sup>(23)</sup>こともあつた。そして「後白河法皇の奉加された銅は、長官である行隆が奉持し、銀、銅の香爐を爐中に入れ、又奉加の人々も多く、京都から色々の施物を運んで鑄造に協力し、また湯になつた銅が流れ出た時には、寺内の禪衆、學衆が袈裟を着ながら水を運び、出家・在家を問わず火を消し身命を惜しまなかつた」<sup>(24)</sup>と傳えている。これに要した金屬は、「熟銅都合八萬三千九百五十斤御身所塗黃金一千兩并所押金薄十萬枚、抑雖有黃金若無水銀則佛身難成、而伊勢國住人大中臣以水銀二萬兩貢上法皇是則自彼仁之舊宅所掘出也、以一萬兩被獻大佛」<sup>(25)</sup>これなのである。こうして盧舍那佛の鑄造は完成し、燒失後六年目の文治元年（一一八五）八月二十八日開眼供養の儀が行われたのである。一ヶ月前の七月廿九日には東大寺開眼供養のため、五畿七道諸國に八月廿五日より九月三日までの間殺生禁斷の宣旨が下されている。新しく鑄造された大佛を拜した九條兼實は、

「去廿七日西初、參着東大寺候、即奉禮滿月御顔候了、自昔御面相一定令劣給之様見給候、御面許金色候也、未及他所之磨瑩候<sup>(26)</sup>」



とその感想をのべている。とにかく未完成ながら開眼供養を行つたのである。以上、東大寺大佛の造顯について時間的経過をおつてみたのであるが、次に興福寺の再建についてみよう。

#### 四

藤原氏の氏寺である興福寺の焼亡は、既に引用した「當時の悲哀父母を喪うより甚し、愍生此の時に逢い、宿業のほど來世また憑るなきか、（略）天を仰いで泣き、地に伏して哭く」という兼實の慨嘆悲泣の姿によつても知られる如く、その衝撃は譬えようもない激しいものであつたであらう。東大寺の再建については、治承五年六月二十六日に造寺・造佛長官の任命があつたが、興福寺については、同じく六月十五日に造寺長官が任命され、木作始、立柱の日時決定があつた。即ち、造寺官には長官藤原兼光、次官高階仲基、判官大江仲守主典中原盛言がそれぞれ任命され、そして、

「陰陽寮擇<sub>レ</sub>申可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>造<sub>ニ</sub>興福寺<sub>一</sub>雜事日時事

木作始日時

今月廿日乙丑 時午二點、若申

立柱日時

七月廿八日壬寅、時寅二點 若辰

上<sub>ニ</sub>梁棟<sub>一</sub>日時

同日壬寅、時午二點、若未

南都佛教の復興について

## 依件行之

「<sup>27</sup>

の如く、七月二十八日に立柱上棟が豫定された。そして興福寺諸堂の再建は、各國の造國制であつた。即ち、「可造興福寺國々」として、金堂は近江・丹波・播磨・美作・備中・讃岐・伊豫の七國が各一間づつを分擔し、廻廊五十間は攝津・甲斐・信濃・上野・若狹・能登・加賀・越中・越後・出雲・筑後・肥前の各國が各四間（但し加賀・越後は五間）、僧房は尾張・參河・美濃・丹後・因幡・伯耆・安藝・土佐・筑前・肥後の各國、經藏は淡路・伊賀・越前、鐘樓は和泉・隱岐、中門一字は但馬、その他、講堂、南圓堂、南大門は内大臣近衛基通が、食堂、上階僧房は寺家が擔當し、東僧房一字は知識を以て造るという方法であつた。主な堂舎を再興順に見ると、

まず焼失の翌年に食堂が再建されている。即ち『三會定一記』養和元年（一一八一）の條に「食堂雖爲<sub>二</sub>平作<sub>一</sub>、修<sub>三</sub>當年維摩會<sub>二</sub>了<sub>一</sub>」<sup>28</sup>とあるところから、講堂で行わるべき維摩會が、講堂焼失のため未完成ではあつたが食堂で行われたわけで、從つて十月の維摩會までに、法會が修せられるまでに再建が進んでいたことが知られる。

次は西金堂で、治承の焼失の時、西金堂に安置の十一面觀音を「大十師嚴宗千勝房藏西隨藏房捨<sub>レ</sub>身自<sub>二</sub>炎中<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>懷出<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>嚴宗之小房中<sub>一</sub>、（中略）以<sub>二</sub>同五年正月<sub>一</sub>、奉<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>禪定院丈六堂<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>修二月行法<sub>一</sub>、其後元暦元年<sub>甲</sub>十二月廿二日、奉<sub>レ</sub>移<sub>二</sub>西金堂<sub>一</sub>」<sup>29</sup>とあつて、西金堂焼亡のため嚴宗によつて十一面觀音像が取り出され、ひとまず嚴宗の小房に安置され、ついで禪定院丈六堂に移され、その後、元暦元年（一一八四）に西金堂に移されたという。從つてこの年には造營は終つていたわけである。

次はその翌元暦二年（一一八五）の東金堂で、これは「興福寺所司持<sub>二</sub>來牒狀<sub>一</sub>云、東金堂爲<sub>二</sub>寺家之汰汰<sub>一</sub>、造營已了<sub>一</sub>」という『玉葉』元暦二年六月二十八日の條の記事によつて知られる。

次は講堂で、『玉葉』文治四年一月二十九日南圓堂の上棟の記事の割註の中に、「去々年講堂造了之間忘他營」とあり、『三會定一記』の文治二年の項に「當年三月十日、九條右大臣殿補任氏長者、講堂造營□□御沙汰土木功未レ終之間、不レ及移レ法會、當長者殿下造功了、所レ被レ沙汰法會也」とあることから、講堂の造營は文治二年（一一八六）に終つたと考えられる。

次は南圓堂で、これは文治四年（一一八八）正月二十九日に棟上げがあり、翌年八月二十二日に兼實は「爲レ奉レ禮三南圓堂佛二觀音像、兼又爲レ檢ニ知造寺二に南都に下向しているが、「去春以後更致ニ造寺沙汰」、法華會以前於南圓堂二行、可レ造ニ畢南圓堂二之由結構、佛又同前（略）次向ニ南圓堂三重組上張レ簷、葺ニ正面檜皮、大略於此會例也」、作事ニ者成寄敷、會以前必可ニ造畢一敷」と、完成近い南圓堂を視察し、九月二十八日「此日參春日神社ニ并奉レ渡ニ新造御佛於南圓堂二」とあることにより、九月三十日から行われる法華會までに完成したことが知られる。金堂は南圓堂と同じく文治四年一月二十九日上棟され、翌年八月にはまだ「此堂半作未レ及レ張レ簷」という状態であつたが、それから五年後の建久五年（一一九四）九月二十二日に供養が行われている。

塔については特に記しているものはないが、『明月記』元久二年（一二〇五）三月十六日の條に「今日於ニ最勝金剛院、被レ始ニ興福寺御塔佛二」とあることにより、この時塔の佛像を作りはじめたことが知られ、従つてこの頃には塔は完成していたと思われる。

次に北圓堂は、『猪隈關白記』承元元年（一二〇七）十二月十五日の條に「興福寺中北圓堂、治承炎上之後未造、此間爲寺家沙汰造之、御佛可爲餘沙汰之由、先日自寺家申之、仍奉造立之也」十七日の條には「今日興福寺中北圓堂御佛奉始之、一昨日勘日時也、佛師法印運慶（中略）北圓堂未」棟上也とあり、承元元年十二月にはまだ上棟には

至つていないが、工事中であつたことが知られる。

以上、興福寺諸堂の再建について見たのであるが、藤原氏の氏寺としてその復興には全力が注がれ、焼失の翌年より「今年春可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>造寺<sup>一</sup>之由、依<sup>ニ</sup>被<sup>ニ</sup>仰下<sup>一</sup>、寺僧同心合力造營<sup>云</sup>」<sup>89</sup>とある如く、寺僧同心合力の造營であり、また造國制という仕組、或は兼實らの盡力により諸堂の造營はかなりはかどり、また諸堂安置の佛像は「於<sup>ニ</sup>造佛之條<sup>一</sup>、其力難<sup>レ</sup>及、仍勸<sup>ニ</sup>進氏公卿已下受領等<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>其功<sup>云</sup>」<sup>89</sup>と、勸進によつても造立すべきことを願つてゐる。こうして諸堂は造營されていつたが、それととも、東大寺も含め堂に安置する佛像が造立されねばならず、ここに佛師達が大いに活躍することとなるのである。

## 五

では、まず東大寺における諸佛像の造立についてみていこう。文治元年の大佛開眼ののち續いて光背・脇士の製作にとりかゝつてゐる。即ち、建久五年（一一九四）三月、光背の作製に着手した。

「一、御光三月十一日始<sup>レ</sup>之

今度寺家并上人可<sup>レ</sup>爲<sup>ニ</sup>順光<sup>一</sup>之由令<sup>ニ</sup>注<sup>ニ</sup>進<sup>一</sup>之材木上人沙汰（略）」<sup>40</sup>

とあり、これは東大寺並に重源の意向により順光とすることとなつた。また、もとの大佛の御光は飛天化佛五百餘尊であつたが、佛師院尊の考えで半丈六の化佛十六軀を付することとなり、院尊が中心となつて六十七人の佛師によつて始められた。その中主な佛師は、大佛師法印院尊、その弟子法眼院實、法橋覺朝、法橋院圓、法橋院範、法橋院俊、法橋院康及び小佛師六十人で院派の佛師達であつた。<sup>41</sup>

ところで、こうした東大寺再建について幕府は協力を惜しまず、文治元年（一一八五）三月には、「七日、庚寅、東大寺修造事、殊可<sub>レ</sub>抽<sub>二</sub>丹誠<sub>一</sub>之由、武衛被<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>御書於南都衆徒中<sub>一</sub>、又被<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>奉加物於大勸進重源上人<sub>一</sub>訖、所謂八木一萬石、沙金一千兩、上絹一千疋<sub>云々</sub>」<sup>(42)</sup>とあり、米一萬石、沙金一千兩、絹一千匹を寄進し、また

### 「東大寺事」

右當事者、破<sub>二</sub>滅平家之亂逆<sub>一</sub>、遂逢<sub>二</sub>回祿之厄難<sub>一</sub>、佛像爲<sub>二</sub>灰燼<sub>一</sub>、僧徒及<sub>二</sub>沒亡<sub>一</sub>、積惡之至比類少之者歟、殊以所<sub>二</sub>歎思給<sub>一</sub>也、於<sub>レ</sub>今者、如<sub>レ</sub>舊令<sub>レ</sub>遂<sub>二</sub>修復造營<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>鎮護國家<sub>一</sub>也、世縱雖<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>澆季<sub>一</sub>、君於<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>舜德者<sub>一</sub>、王法佛法共以繁昌候歟、御沙汰之條、法皇定思食知候歟、然而如<sub>二</sub>當時<sub>一</sub>者、朝敵追討之間、依<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>、若令<sub>二</sub>遍々<sub>一</sub>候歟、且又當寺事、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>丁寧<sub>一</sub>之由、所<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>相存<sub>一</sub>候<sub>上</sub>也、

仍勒<sub>レ</sub>狀如<sub>レ</sub>件

前右兵衛佐源朝臣

三月七日

」<sup>(43)</sup>

と、南都の衆徒に對して、その修造に盡すよう御書を送っている。そして、建久五年三月には「廿二日癸未、被<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>砂金於京都<sub>一</sub>、是東大寺大佛御光析也、被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>佛師院尊<sub>一</sub>、支度、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>進<sub>二</sub>二百兩<sub>一</sub>旨、有<sub>二</sub>御教書<sub>一</sub>」<sup>(44)</sup>砂金二百兩を御光料として送り、また五月十日にも百三十兩を送つてをり、六月には

「廿八日丁巳、造東大寺間事、將軍家旁令<sub>二</sub>助成<sub>一</sub>給、材木事、仰<sub>二</sub>左衛門尉高綱<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>周防國<sub>一</sub>、殊有<sub>二</sub>採用<sub>一</sub>、又二菩薩四天王像等、死<sub>二</sub>御家人<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>造立<sub>一</sub>」<sup>(45)</sup>所謂、觀音宇都宮左衛門尉朝綱法師、虚空藏穀倉院別當親能、増長富山次郎重忠、持國武田太郎信義、多聞小笠原次郎長清、廣目梶原平三景時、又戒壇院管作、同被<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>付小山左衛門

尉朝政、千葉介常胤以下二訖、而其功頗遲引之間、今日所被<sub>レ</sub>催促<sub>二</sub>也、但各偏存<sub>二</sub>結縁之儀<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>成功之由、御下知先訖（略）<sup>(46)</sup>

とあり、脇侍及び四天王像造立の願主をそれぞれ御家人に命じてをり、その造立を急がせている。

建久五年十二月に南中門の東方多聞天、西方持國天が作られはじめてをり、この二像はもと二丈の高さであつたが、此度のは三尺増して二丈三尺とし、佛師は次の人々であつた。

東方天、大佛師快慶

小佛師十四人、良公、慶實、慶仁、仁慶、□□、良清、命猷、良快、行智、猷玄、慶清、快尊、定秀、慶覺、

繪佛師廿九人 大佛師有尊、

小佛師十五人 有尊、西觀、淨尊、西賢、良尊、淨□、覺尊、覺禪、圓雲、□廣、有慶、良禪、有心、來西、

有賢、

大工宗包、小工十一人

西方天 大佛師定覺

小佛師十三人、雲慶、行賢、尊珍、聖慶、慶範、良尊、盛長、尋慶、行俊、

繪佛師、大佛師定順

小佛師十三人、實祐、忠尊、定圓、良眞、良慶、良賢、明經、祐慶、緣覺、勝圓、淨圓、佛念、定勝

大工□□、小工九人

その他、寺家の繪佛師である大佛師勢順、小佛師慶仁、善長、慶深、信智、善興、幸玄、教順、幸順、經玄、定慶、

慶圓など十二名、及び塗師三十二人がこれに加わつて造立してゐる。<sup>(47)</sup>

建久七年六月には脇侍の觀音と虚空藏が造り始められたが、願主は、前述の如く左衛門尉朝綱入道で、大佛師法橋定覺と丹波講師快慶が半身ずつ作つて合わせて一體とし、虚空藏像は掃部頭藤原親能が願主で、大佛師法橋康慶、同運慶父子がそれぞれ半身を作つて一體とした、所謂木寄法によつて作られたのである。勿論この大佛師四人の他に、小佛師八十人、番匠八十人、杵人八十人が従事してゐる。<sup>(48)</sup>

また同じく願主が決められた四天像については、同年六月に造り始めた。佛師は、東方持國天は大佛師法眼運慶、南方增長天は大佛師法眼康慶、北方多聞天は大佛師法橋定覺、西方廣目天は大佛師丹波講師快慶がそれぞれ擔當し、小佛師採色佛師それぞれ二十人を率いて十二月に完成せしめてゐる。<sup>(49)</sup> 僅か半年足らずで脇侍を含め六體の佛像を完成したわけで「速疾造立可謂奇特矣」と驚いてゐる。そしてこれには「所塗漆各八石也、採色丹具遣直物於大唐所買來也、惣二萬餘兩目、餘雜丹不能注之、金薄及五萬枚」を要したという。<sup>(50)</sup>

次に、東大寺の鎮守、(手向山)八幡宮の本尊である僧形八幡神像が開眼されたのは建仁元年(一二〇一)十二月である。すでに治承の炎上ののち建久五年十二月に、八幡大菩薩の「我是聖母大菩薩也、東大寺大佛、是我本尊也、供養之後可遷宮」との神託があつたといひ、それによつて、「當寺別當次第云、法務僧正覺成<sup>東寺長者號保壽院之仁、</sup>建久八年二月廿九日八幡宮上棟、木工百人、作事上人沙汰、行事官儲等、寺家之沙汰也」<sup>(51)</sup>建久八年二月廿九日に八幡宮造營成つたのであるが、御神體についてはまだ造立されていなかった。その御神體をつくるについて、東大寺の古老の話では、あつたとし、また脇足を御神體に準じたといい一定していなかった。もしあつたとして、朝廷では新造してはいけないという。何故ならば石清水の御神體も焼失して以來そのままになつてをり、宇佐にも別に

御神體はないという理由からであつた。<sup>64)</sup> そのうち、八幡宮の造營が成つたので、八月に東大寺僧綱等が勝光明院の寶藏にある畫像を神體とせんことを請うたのである。ところがこれに對し、男山八幡宮や神護寺の文覺上人がこれを望み、文覺は故事を申立てたのでこの畫像は神護寺に賜ることになつたのである。<sup>65)</sup> そこで東大寺は、新たに御神體を作ることになり、土御門天皇、後鳥羽上皇、七條院殖子、八條院暉子内親王、守覺法親王らを願主として上下に勸進し、快慶及び小佛師二十八名、それに漆工・銅細工が加わつて造立をみたのである。この僧形八幡像が上下に結縁したものであることは、銘によつて明らかである。

また、建仁三年（一二〇三）には「南大門之二王建仁三年七月廿四日被造大佛師四之内運慶備中法橋、安始之聖人御殿沙汰也。人云々合左右二十人也、浮色被爲給了、十月三日開眼了、依此賞勢俊文法殿補とある如く、運慶及び快慶によつて、七月廿四日から十月三日に至る約七十日間に南大門の金剛力士像が造立されている。

以上の如く、多くの大佛師・小佛師達によつて佛像が造立されていき、建仁三年十一月（一二〇三）には總供養が行われた。その模様については『明月記』『百鍊抄』『東大寺續要錄』などに記しているが、『東大寺供養式』にのせる「御願文」<sup>67)</sup>には、總供養までに造立された佛像及び堂舎について記している。

「〔前文略〕遷建立十一間二階大佛殿一字、奉鑄顯金銅十丈七尺盧舍那如來一體、莊嚴如舊瞻仰惟新、奉造立金色六丈觀世音虛空藏等二菩薩像各一體、石像八尺菩薩各一體、彩色四丈三尺多聞持國增長廣目等四天王像各一體、石像八尺同天王各一體、此外左右登廊、四面歩廊、東樂門西樂門南中門北中門南大門并鎮守八幡宮等同勸揆日之巧、早終成風之功、其内南中門安置彩色二丈三尺多聞持國二天王像各一體、南大門安置同二丈六尺金剛力士像各一體〔下略〕」



が造營、造立安置され、また、

「於<sub>二</sub>自餘堂塔門垣等<sub>一</sub>者、或寺家別當聊加繕理、或土木無隙猶未造畢、事之最大匪<sub>レ</sub>違具錄<sub>二</sub>」

と、寺家においてそれぞれ土木工事が進められていることを記している。そして、この總供養の後も、諸堂の造營、諸像の造立が進められていったのである。

## 六

さて、以上みてきた如く、東大寺は鎮護國家の寺として、興福寺は攝關家藤原氏の氏寺として直ちに復興に着手し、諸堂の造營、佛像の造立がなされたのであるが、最後にこれを通して二・三問題點を考えてみたい。

まず佛像の造立にたずさわった佛師についてである。この頃の佛師の主な流れは四流であつた。<sup>60</sup>即ち、定朝ののち、その子覺助、その弟子院助と次第し、當時の宮廷や貴族關係の主な造佛を行つていた院尊を中心とする院派。定朝の弟子長勢の一門で、明圓を中心とする圓派。そして覺助の子頼助より康助・康慶・運慶と次第する慶派、及び康助・康朝・成朝と次第する一派。この四流派で、これ等の佛師の活躍は、院派・圓派は京都を中心に、慶派は南京佛師とよばれ南都に本據をおき、特に院派、圓派の佛師が中心に活躍していた。例えば、壽永三年（一一八四）の佛師の僧位に關する記事によれば、僧綱の最高位の法印には院尊（院覺の弟子、院派）、法眼には明圓（忠圓の子、圓派）、法橋には院實（院尊の子、院派）、院尙（院朝の子、院派）、康慶（肥前小佛師、慶派）、朝圓（明圓の子、圓派）、寬圓（明圓の子、圓派）となつてをり、慶派一門で運慶の父、康慶が一人名を出しているにすぎない。また興福寺の再興に當つて、諸堂の造佛を擔當する佛師は、金堂は法眼明圓（圓派）、講堂は法印院尊（院派）、食

堂は無官成朝、南圓堂は法橋康慶（慶派）、と定められたが、金堂と講堂という主要な堂舎の佛像を京都の院派・圓派の佛師に當てられたことは、その活躍もさることながら、興福寺と京都における藤原氏、そして京佛所との密接な關係を示すものであろう。このような、傳統をもつ京佛師院派、圓派の興福寺の佛像の造立に對し、奈良を地盤とし、興福寺の佛師を自認する成朝一派は頼朝に訴えているのである。即ち文治二年（一一八六）三月

「南京大佛師成朝言上

興福寺御佛等早被<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止他佛師<sub>一</sub>任<sub>二</sub>相傳理<sub>一</sub>一向成朝可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>造營<sub>一</sub>事

件大佛師職者、成朝先師相承連綿無<sub>レ</sub>絶、所謂定朝、覺助、康助、康朝等也、先祖五代之間、覺助、頼助等之時、御寺雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>炎上事<sub>一</sub>、乍<sub>レ</sub>置<sub>二</sub>大佛師<sub>一</sub>、他人全無<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>勤<sub>二</sub>仕御佛等<sub>一</sub>、況彼覺助頼助几僧間、奉<sub>二</sub>御佛造營事<sub>一</sub>、御供養之時昇<sub>二</sub>綱位<sub>一</sub>畢、今成朝任<sub>二</sub>相傳理<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>造營<sub>一</sub>之處、他佛師等各々致<sub>二</sub>濫望<sub>一</sub>、面々令<sub>二</sub>奉仕<sub>一</sub>、秋歎之<sub>二</sub>至無<sub>レ</sub>物<sub>一</sub>取<sub>レ</sub>驗（中略）<sup>60</sup>早任<sub>二</sub>先師相傳理<sub>一</sub>如<sub>二</sub>申請<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>停<sub>二</sub>止他佛師等<sub>一</sub>、成朝一向可<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>造營<sub>一</sub>御佛之由、欲<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>（略）<sup>61</sup>」

といひ、東金堂の造佛について成朝に宣下があつたにもかゝらず、勝長壽院の造佛のため鎌倉に下向している間に、院尙（院朝の子、院派）が所望して勤仕していることを記して、その非を正されんことを訴えている。

このような南京佛師の動きにより、院派・圓派の奈良における立場は、「南大門金剛力士、以<sub>二</sub>佛師康慶<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>造立<sub>一</sub>之由、寺家懇望、<sup>62</sup>先院實、奏聞之處、可<sub>レ</sub>問<sub>二</sub>院尊<sub>一</sub>、<sup>63</sup>院実、父、之由有<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>之<sub>一</sub>」の『玉葉』建久

二年（一一九一）三月の記事が示す如く、興福寺は南大門金剛力士の造立に院派の院實が決つていたところ、慶派の康慶たらしめんとする變更を申し出ていることは、院派にかわつて慶派が南都における造佛の主流をしめていく

一つの證とみることができよう。

ここで、治承四年以後の東大寺・興福寺の造佛と佛師の關係を年代順に示すと次の通りになる。

文治元年（一一八五） 東大寺大佛鑄造（中間供養）

陳和卿

〃 四年（一一八八） 興福寺南圓堂諸佛像造

康慶

建久元年（一一九〇） 東大寺大佛光背

院尊

〃 五年（一一九四） 東大寺南中門東方多聞天

快慶

〃 東大寺南中門西方持國天

定覺

〃 興福寺中金堂釋迦如來像

明圓

〃 興福寺中金堂彌勒淨土變

成朝

建久七年（一一九六） 東大寺大佛脇侍觀音像

定覺

〃 東大寺大佛脇侍虛空藏

快慶

〃 東大寺大佛殿四天王像持國天

康慶

〃 增長天

運慶

〃 多聞天

康慶

〃 廣目天

定覺

建仁元年（一二〇一） 東大寺僧形八幡神像

巧匠安阿  
弥陀仏

快慶

〃 舊興福寺西金堂帝釋天像

定慶

建仁二年（一二〇二） 興福寺西金堂梵天像

定慶

建仁三年（一二〇三） 東大寺南大門仁王像

運慶

安阿弥  
陀仏

快慶

となり、院派では院尊のみで、圓派では明圓、他はすべて慶派の佛師が活躍し、定慶二、康慶三、運慶三、定覺三、快慶五となり、特に快慶の活躍が注目されるのである。快慶が特に東大寺を中心に活躍していることは、俊乘房重源との關係によるものであることは明らかである。

ところで東大寺、興福寺の再建を支えた背景を考えた場合、その成立事情において官寺と氏寺という寺の性格の相違が反映し、東大寺の再建は、技術者であるとともに勸進にすぐれた俊乘房重源の活躍と、賴朝の支援、及び重源を中心とする佛師も含めた淨土教徒の協力によつて進められたと云えよう。重源の勸進をはじめとする彼の事蹟については『南無阿彌陀佛作善集』に詳しいが、勸進の一例として『玉葉』養和元年十月九日の條に、「東大寺奉加之聖人、廻洛中諸家<sup>63</sup>請之<sup>64</sup>奉<sup>65</sup>始<sup>66</sup>法皇、女院御奉加銅十斤、他所或錢一千貫文、若金六兩<sup>67</sup>」と洛中の諸家貴賤を問はず勸進し、女院その他より奉加をうけたことを記している。重源が諸人に阿彌陀佛號をつけはじめたのは、壽永二年（一一八三）頃からで、安阿彌陀佛をなめる佛師快慶との信仰上からの交渉は、建久三年（一一九二）快慶作の醍醐三寶院の彌勒像の「巧匠<sup>梵字</sup>（ア）ン 阿彌陀佛」の銘を初見としているから、その頃には既に重源と交渉を

もち、淨土信仰に歸依して安阿彌陀佛となつたと考えられ、そして彼の活躍は重源との關係においてより活潑となつたと云えよう。それは快慶が、康慶に師事し運慶の弟子にもなつた慶派一門ではあるが、いわば弟子の筋に當る彼が、師である康慶・運慶に伍して活躍し得たことをみても首肯されるであらう。その代表作とされるのは東大寺僧形八幡神像であり、これは、東大寺關係で上下に勸進し結縁した唯一のものといえよう。造立の施主は巧匠安阿彌陀佛快慶、小佛師二十八人が従事しているが、その中に師である運慶の名も見ることができ、快慶との關係において注目される。そして阿彌陀佛號をなのある人々は、了阿彌陀佛、性阿彌陀佛、比丘尼顯阿彌陀佛、眞阿彌陀佛、聖阿彌陀佛、定阿彌陀佛、行阿彌陀佛、善阿彌陀佛、空阿彌陀佛、珍阿彌陀佛、任阿彌陀佛らの人々が加わり結縁しているが、之等の人々は重源の門弟か或は歸依者であることは間違いないところであり、一般子女の結縁も重源を中心とする淨土信仰をもつ人々であつたと云えよう。

ところで、先にのべた建久五年の南中門の多聞天・持國天の造立、及び建久七年の大佛殿の脇侍の二菩薩と四天王の造立についての記事は、まことに貴重な資料といえる。即ち、一つの佛像を造立するについて、機構として大佛師を中心として小佛師、繪佛師、塗師、更には番匠、杣人を擁していたことが窺われ、一鉢ずつについての人員を記すなど、當時の造佛作業を詳しく示している。又、大佛殿の觀音・虛空藏の二鉢は「各作<sup>64</sup>ニ半身<sup>ニ</sup>後合爲<sup>ニ</sup>一鉢<sup>ニ</sup>」とある如く、ともに各半身を作つてから、あとから合わせて一體とする方法がとられたことを記すが、これは佛師が佛像をどの様に作つたかを示す好例であり、この様な木寄法は、勿論定朝が工夫して生れたともいわれるが、しかし、東大寺・興福寺の復興という佛像を多く作らねばならなかつた時、時間的にも作業的にも多く作るこ

とが容易で、この方法が最も適していたのである。

次に、先にのべた建仁三年の總供養の時の願文に、石造八尺の觀音と虚空藏の各一軀、同じく石造四天王像四軀が造立安置されていたことを述べてをり、また『東大寺造立供養記』によれば、中門の石獅子などが宋人の字六郎等四人によつて作られ、しかも日本の石では造り難いため中国にまでこれを求め、その費用三千餘石であつたことを傳えているが、東大寺復興の中心人物であつた重源の入宋、宋人の來朝などにより、宋風美術の影響の大きかつたことが知られるのである。

## 七

以上、東大寺・興福寺の諸像の造顯を通して、鎌倉文化の一端をみたのであるが、その像造は主に慶派の佛師によつてなされたが、しかし藤原和様の傳統を引く院派や圓派の力が全くなつたわけではなく、これらの派が魅力を失いかけていた時、東大寺・興福寺をはじめ焼失した寺々の復興で多くの佛師を必要としていた機に、南京佛師の慶派が像造に参加するようになり、そこに今迄にない自由な寫實的な要素をもつた佛像を作り上げたのである。それは、理念としては失われたものの再現、天平への復興ではあつたが、その様式は、前代末期以來の動亂、社會不安からくる力強いものへの渴望と一般的な現實主義的風潮によるもので、武家政權の確立に關連して、今までの傳統にとらわれない誰でも親しみやすい寫實性をもつた鎌倉彫刻が結實したのである。

## 註

(1) 『玉璽』卷第三十五、治承四年十二月二十九日條

(2) 『同』卷第三十六、治承五年一月六日條

(3) 右 同

- (4) 『山槐記』治承四年十二月二十八日條
- (5) 『玉葉』卷第三十六、治承五年一月六日條
- (6) 『三曾定一記』第一、養和元年條（日佛全第四十九、二二〇頁）
- (7) (5)に同じ。
- (8) (6)に同じ。
- (9) 『東大寺續要錄』諸院篇（續々群第十一、二八一頁）
- (10) 『東大寺續要錄』造佛篇（ 〃 一九六頁）
- (11) 『玉葉』卷第三十五、治承四年十二月二十九日條
- (12) 『同』卷第三十六、治承五年一月一日條「何況南都七大寺悉變灰燼、就中東大寺事、公家專可歎思食、興福寺事、氏之大事也、云彼云是、尤可有哭泣之禮歟」
- (13) 『東大寺續要錄』造佛篇（續々群第十一、一九八頁）
- (14) 『東大寺造立供養記』（日佛全第四十九、一五〇頁）
- (15) 『右同』「行隆云、天平行基菩薩與教願令勸進、齊衡眞如親王廻丹誠而唱智識、聖人發心、感應不空、早可令合繪旨勸衆庶之由」
- (16) 『本朝祖師傳記繪詞』卷第二（法然上人傳全集、四七七頁）
- (17) 『東大寺續要錄』造佛篇（續々群第十一、一九七頁）
- (18) 右同（同 一九九頁）「養和元年秋八月重源上人賜官旨、造一輪車六兩、令勸進七道諸國」
- (19) 右同「被鑄始大佛御頭羅髮之時、戒師授戒於鑄工等、次踏多々羅、即奉鑄羅髮三流」
- (20) 右同
- (21) 右同
- (22) 右同（同 二〇〇頁）
- (23) 右同
- (24) 右同（同 二〇一頁）

右 同

(26) 『玉葉』卷第四十二、元暦二年八月二十九日條

(27) 『玉葉』卷第三十六、治承五年六月十五日條

右 同

(29) 『三會定一記』第一(日佛全第四十九、二二〇頁)

(30) 『興福寺流記』(日佛全第八十四、三〇〇頁)

(31) 『三會定一記』第一(日佛全第四十九、二二〇頁)

(32) 『玉葉』卷五十三、文治四年一月二十九日條

(33) 『同』卷五十五、文治五年八月二十二日條

(34) 『同』卷五十五、文治五年九月二十八日條

(35) (32)に同じ。

(36) (33)に同じ。

(37) 『玉葉』卷六十五、建久五年九月二日條

(38) 『三會定一記』第一(日佛全第四十九、二二〇頁)

(39) 『玉葉』卷四十二、元暦二年六月二十八日條

(40) 『東大寺續要錄』造佛篇(續々群第十一、二〇二頁)

右 同

(42) 『吾妻鏡』第四、文治元年三月七日條(新訂增補國史大系三十二、一四〇頁)

右 同

(44) 『同書』第十四、建久五年三月廿二日條(同 五〇五頁)

(45) 『同書』第十四、建久五年五月十日條(同 五〇六頁)

(46) 『右同』第十四、建久五年六月廿八日條(同 五〇七頁)

(47) 『東大寺續要錄』造佛篇(續々群第十一、二〇三頁)



右同

(49) 『東大寺造立供養記』(日佛全四十九、一五三頁)「同年(建久七)八月始奉造四天王像也、東方天大佛師法眼蓮慶、南方天法眼康慶、北方天法橋定覺、西方天快慶也、從六月十八日至十二月十日、六丈脇士二體、四丈四天四體、經半年而造三六體一矣」

(50) 『東大寺續要錄』造佛篇(續々群第十一、二〇四〜二〇五頁)

(51) 僧形八幡神像銘文(造像銘記)

(52) 『東大寺八幡大菩薩驗記』(續群第三上、二四六頁)

(53) 『同書』(二四七頁)

(54) 『同書』(二四六頁)「東大寺守護八幡宮、大佛殿燒失之時、同以回祿、而今寺家造畢件神殿、而古老住僧等申云、御鉢御坐云由承傳之、或曰、以御脇足准御鉢云々、未定、可被奉造立御鉢歟、將亦可用如在禮歟、可計申者、予申云、先可被勘文、其上可有沙汰、但本經雖御鉢御坐、新造之條難計申、石清水火事之時、敦實親王奉造立法鉢阿彌陀三燒失、其後有議定、不被改造之、宇佐宮、御鉢不御坐(略)」

(55) 『同書』(二四七頁)「東大寺寺僧僧綱已下三四十人許、去夕上落、爲申鎮守御聖鉢事、可參陣云々、其趣云(中略)而炎上以後、上人雖奉造如形之神殿、敬神之禮若疎歟、或寺僧夢云、着赤衣之人立南大門邊給云、我居所有汗穢之疑、仍不住其所云々、是已鎮守令示現給也、仍上人殊成大廈之動、終不日之功、雖然、無御聖體、仍奉請彼勝光明院寶藏、大菩薩御聖鉢、即可爲此鎮守御正鉢之由、寺家使枉所、奏請也云々(中略)件御影事、可被安置于男山之由、宮寺殊望申之、文覺上人再興神護寺、而大菩薩御圖繪大師御影適安置于當寺納涼房之上者、一具可有御施入之由、頻申之、仍、朝議不一揆之處、昔弘法大師、於當寺奉遇大菩薩、忝爲末代、互被寫留御影了、由緒專有當寺、更非同日之論由、依申達、蒙、勅許畢、但止所相副之御願、可被渡御影之由、内々被仰下之間、重源和尚腹立而不被申請云々、則密々奉新造法鉢云々」

(56) 『東大寺別當次第』(日佛全六十五、一八八頁)

(57) 『東大寺供養式』(日佛全四十九、一三六頁)

(58) 佛師の系譜については小林剛氏の説による。

(59) 『僧綱補任殘闕』(日佛全六十四、一四〇頁) 元暦二年の條にもあり。

南都佛教の復興について

- 60 『吾妻鏡』第六、文治二年三月二日條（新訂增補國史大系三十二、二〇五頁）
- 61 『玉葉』卷六十一、建久二年九月八日條
- 62 『玉葉』卷三十六、養和元年十月九日條
- 63 『南無阿彌陀佛作善集』（俊乘房重源史料集成）「阿彌陀佛名付日本國貴賤上下事、建仁二年始之成廿年」
- 64 『東大寺造立供養記』（日佛全四十九、一五二頁）
- 『東大寺續要錄』造佛篇（續々群十一、二〇四頁）
- 65 『東大寺造立供養記』（日佛全四十九、一五三頁）「建久七年、中門石獅子、堂内石脇土、同四天像、宋人字六郎等四人造之、若日本國石難造、遺價直於大唐一所買來也、渾貫雜用等凡三千餘石也」